

2021年3月14日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「十字架への道」

聖書：マルコによる福音書15:16～32

主イエスは何故、神の子でありながら十字架の道を歩んだのか？ ゲッセマネの祈りの中でのその決意が記されている。「イエスはひどく恐れもだえ始め、…私は死ぬばかりに悲しい。できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈る…アツバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取りのけてください…しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」(マルコ14:33～36)一緒に祈って欲しいと弟子たちを誘ったが、イエスの気持ちなど察することなく、眠りこけている。しかしそれでもイエスは、弟子たちに「立て、行こう」(マルコ14:42)と呼びかけた。本来なら、怒って置いて行きそうなものだが、神の意志にそぐわない弟子たちを「立て、行こう」と言う。どこに行くのか？それは、これから歩まれるイエスの十字架への道を、見届けよ、そして、私の証言者となれ！ということであろう。

イエスは弟子たちに「立て、行こう」と言って、見せたご自分の姿は、まるで「屠り場に引かれる子羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように」自らの姿をさらしたわけで、そこにどんな意味があるのか？「他人は救ったのに、自分は救えない」(マルコ15:31)という有様に、どんなメッセージがあるのか？

マタイ福音書4章に悪魔の誘惑の話がある。《悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、／あなたの足が石に打ち当たることのないように、／天使たちは手であなたを支える』／と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。》この悪魔の誘惑はこの世にて、天使の業をイエスが用いることを進めているわけで、もしイエスがその天使の業をこの世で使ってしまうと、イエスの十字架への道はなくなってしまうということ。天使を使って十字架から降りることが出来てしまうわけである。

イエスの「十字架への道」とは、神でありながら、人としての苦難の道を通られたということであり、ゆえに私たちの苦難に対しても向き合ってくださいということである。(神谷)